

平成 15 年度特別研究

患者中心の継続看護における外来看護の役割

看護学科 守田稲子 牧野典子

1 研究の目的

周手術期にある患者は、手術までの日数が短縮化したことに伴い術前の準備を自宅で行わなくてはならない。また、術後の体調管理を退院後に自宅で行うケースが多くなってきている。これは、手術技術の向上と診療報酬の度重なる改定で入院期間が短縮化し、治療と処置が必要な期間以外は患者自身の自己管理に任されるクリニカルパスの適応が定着しつつあるからに他ならない。患者が有効に自己管理するためには、十分な説明と理解が必要である。このような患者に対して、看護師は十分な配慮を行っているだろう。しかし、退院後は日常生活上の小さな不安や些細な心配事であっても患者にとっては大きなことと考えた。

平成 14 年度の学長特別研究結果では、看護師の患者に求める自己管理への期待と看護師が実施する指導内容とにずれがあることがわかった。外来受診時の患者の声も「看護師に聞きたいことがあるが忙しそうで聞きにくい」、「医師に聞いたから看護師に聞くことはない」とあり、看護師に聞けば解決しそうな日常生活のちょっとしたことを聞いていないことがわかった。

そのため今年度は、退院後、初回外来受診時の患者及び家族から外来看護に対する要望についての調査を行い、患者が求めているものを明らかにし、患者中心の継続看護における外来看護の役割について分析考察を深め、外来における看護師の患者援助を検討することを目的とする。

2 研究の方法

1) 対象

クリティカルパス適応の患者様とそのご家族 30 組程度

2) 方法

- (1)協力を得られた病院の外科病棟にクリティカルパス適応で入院され、退院を迎える患者様及び家族に面接し、研究の目的を文章で提示し口頭で説明を行い、承諾を得る。
- (2)協力を得られた外科病棟の看護師長の援助を得て外来日時を検索する。
- (3)退院後、初回外来受診日に外来において診察の待ち時間に患者様及び家族に面接し、退院後の日常生活に関する内容や外来に対する意見を聞き取りし記述する。
- (4)質問は自己効力感を用い、聞き取り内容はK J法を用いて分析する。

3) 期間と場所

平成 16 年 2 月及び 3 月、S 病院外科病棟及び消化器センター外科外来

3 研究結果

30 組程度を対象としているが、面接終了者は 4 名で現在進行中である。面接者の方から看護師に対する要望は現時点で聞かれませんが、対象数を増やすことで問題点が明らかになるものと考えます。平成 16 年度も継続して行う計画です。